

## 第3章 名勝満濃池の概要

### 第1節 指定に至る経緯

満濃池は「萬濃池後碑文」によると 701 - 704 年(大宝年間)に讃岐の国守道守朝臣により築かれたとされる。以来、度重なる決壩と弘法大師空海(平安時代)や西嶋八兵衛(江戸時代)、長谷川佐太郎(明治時代)らによる修築を繰り返し、明治～昭和にかけての第1次～第3次嵩上げ事業を経て現在に至っている。

香川県は、温暖・少雨である気候条件や、讃岐山脈から派生する主要河川の河川勾配が急傾斜であるという地形的条件の制約により、河川からの恒常的な取水が困難となることから、古代よりため池等の灌漑施設を構築し対処してきたという歴史がある。

こうした満濃池の歴史性や灌漑史に関わる側面が広く知られる一方で、広大な池面と周辺の山容が一体となった風致景観は、江戸時代後期から幕末にかけての地誌等において名所として盛んに取り上げられ、詩歌の対象になるなど、名勝地としての性格をもっていたことが知られる。

また、現在においても、毎年 6 月 15 日前後に実施されるゆる抜きは、香川の初夏の風物詩として多くの見物客が訪れる。広大な池面に写る周囲の丘陵や山容は、新緑や紅葉など四季とともに変化をみせ、県内外の来訪者を魅了している。

まんのう町教育委員会では、平成 19 年度に満濃池総合調査を実施し、主に満濃池の歴史環境や考古学的調査の成果を「満濃池総合調査報告書」(平成 20 年 3 月 10 日発行)に取りまとめた。

その後、まんのう町内で満濃池の豊かな歴史性に裏付けられた優れた風致景観を将来へ向けて保存・活用していく機運が高まり、まんのう町は名勝調査を実施し文化財として価値付けを行うことを決定した。名勝調査は国庫補助事業を活用して平成 29 年度から平成 30 年度の 2 か年において実施した。調査の主な内容は、風致景観、植生の現況や地形・地質等の自然的調査と、歴史的由緒や文芸作品等の人文的調査を実施することで名勝地としての価値付けを行うことを目的とした。また、現況調査には、堤体部分を中心とした測量や空中写真撮影委託を行い、保護を要すべき範囲を検討する資料を得た。これらの調査成果は「満濃池名勝調査報告書」(平成 31 年 3 月 29 日発行)に掲載している。平成 31 年 1 月 28 日に「満濃池の名勝指定について(意見具申)」を文部科学大臣へ意見具申し、令和元年 10 月 16 日に国の名勝に指定された。統いて、令和 2 年 3 月 10 日に名勝満濃池を管理すべき地方公共団体として、まんのう町が文化庁長官により指定された。

### 第2節 指定の状況

#### 1 指定状況

満濃池は令和元年 10 月 16 日に国の名勝に指定、統いて令和 2 年 3 月 10 日に名勝満濃池の管

理団体としてまんのう町が指定された。官報告示の内容を以下に示す。

<名勝指定> 令和元年10月16日官報 ○文部科学省告示第78号

名 称：満濃池

所 在 地：香川県仲多度郡まんのう町

地 域：参考図のとおり。

備考：参考図の詳細は香川県文化財担当部局及びまんのう町文化財担当部局に備え置いて縦覧に供する。

指定基準：2橋梁、築堤 11展望地点

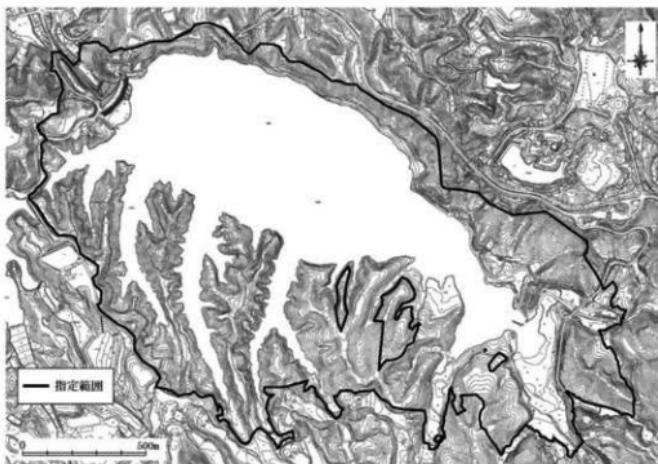
<管理団体指定> 令和2年3月10日官報 ○文化庁告示第33号

名 称：満濃池

指定告示：令和元年文部科学省告示第78号

管理団体：まんのう町(香川県)

名勝 満濃池 指定地域参考図



資料3-1 名勝満濃池指定地域参考図(令和元年10月16日官報)

## 2 指定説明文

### 満濃池 香川県仲多度郡まんのう町

満濃池は、讃岐山脈に派生し香川県西部の丸亀平野を北西に向かって流れる金倉川の上流域に所在する。丸亀平野は讃岐平野の中部に位置して、土器川及び金倉川によって形成された沖積平野とその南部に広がる岡田台地からなり、古代から条里地割に基づく耕地が開発され、灌漑水路網が構築されてきた。一方、この地域は、自然河川の恒常的な流量が少なく、安定した利水環境を整えるため、数多のため池も造築されてきた。

『讃岐国萬濃池後碑文』(寛仁4年(1020))によれば、大宝年間(701~704)に讃岐国守道守朝臣が築堤してため池としたのを始めと伝え、その後、度重なる破堤と修築を繰り返してきた。なかでも、弘仁12年(821)の弘法大師空海による再築の事跡は『日本紀略』(11世紀後半から12世紀成立)や『今昔物語集』(12世紀前半成立)に記され、満濃池の著名を広く知らしめてきた。しかし、元暦元年(1184)の破堤後は修築されることなく、長く耕作地として利用されていた。江戸時代初期に至り、生駒藩奉行の西嶋八兵衛が飢饉回避や石高増を目指して治水事業を推し進めるなかで、寛永8年(1631)には満濃池の堰堤も再築され、以後220年余りにわたって木製樋管を交換する搖替普請を繰り返しながら、水掛かり村々(灌漑受益の村々)の多大な賦役の下に維持された。嘉永7年(1854)の大地震による破堤後にはしばし修築困難であったが、製糖業で財を成した金蔵寺村の豪商和泉虎太郎や池御料の榎井村で庄屋を務めた長谷川佐太郎の尽力によって、度重なる搖替普請を要しない石穴底樋への改良を加え、明治3年(1870)に再築された。いっぽう、近代土功制度の成立とともに明治12年(1879)に設立された満濃池水利土功会の下でため池と配水の組織的管理が行われるようになり、明治25年(1892)の満濃池普通水利組合への組織変更以降、今日の満濃池土地改良区に至るまで、満濃池は時代の変化に応じて保全されてきた。特に近代以降、栽培作物の転換や耕地面積の拡大、干ばつの発生などから水不足が漸次深刻化したことを受けながら満濃池の堰堤は三次にわたって順次、0.91メートル(第一次、明治39年(1906)竣工)、1.52メートル(第二次、昭和5年(1930)竣工)と嵩上げされ、昭和33年(1958)竣工の第三次では6.0メートル余り嵩上げされて、貯水量を第二次以前の約2倍の約1,540万トンとし、満水時面積は約138.5ヘクタールで、現在、灌漑用ため池としては日本国内最大規模である。

満濃池の風致景観は、築堤を基点として、南東側に向かって広がる水面と大川山(標高1042.9メートル)を含む山並みへの眺望並びに下流側の放水施設等から構成される。ため池根幹をなす築堤はアーチ形式の土堰堤で、総高32メートル、延長約156メートル、天端幅約20メートルを測る。築堤北端部には、由縁を伝える「真野池記」(明治8年(1875)建立)や「松波長谷川翁功德之碑」(明治29年(1896)建立)が保存されており、築堤延長上の高まりに、北側には讃岐国延喜式内社のひとつと伝わる神野神社の境内地が、南側には空海創建の法灯を継ぐ五穀山神野寺の境内地が所在する。池岸の形状は地質を反映して、北岸では疊層の固結によって緩やかな曲線形状であるのに対して、南岸ではシルト-砂層のために複雑に入り組んだ峡谷を深く刻んで対照を成している。群青のため池には、築堤近傍に空海が再築の際に護摩を焚いたとされるかつての築堤右岸を成した護摩壇岩、第三次嵩上げ工事で構築された余水吐(右岸側)と取

水塔(左岸側)があるほかは、広大な水面の遙か先に翠緑のなだらかな丘陵地、そのさらに奥向きには讃岐山脈の急峻莊厳な山容と中空の蒼天を望むばかりである。築堤下流側では、第三次嵩上げ工事によって構築された余水吐放水工と樋門が堰堤に付属して固有の風致景観を引き立てている。

こうした満濃池の觀賞は、『金毘羅山名勝図会』(文化年間〈1804～1818〉)に「山水勝地風色の名池」とあるほか、『讃岐国名勝図会』(幕末から明治時代初期)の「萬濃池 池宮」などにも堰堤を手前にため池とその遙か遠方の聳える山容を描いて紹介されて広く定着していった。近代においては、第一次嵩上げ工事において導入された赤レンガ取水塔を含むため池の風景が絵葉書などにしばしば取り上げられ、満濃池に特徴ある風景として普及した。近年においても、毎年6月のゆる抜きで樋門から溢れ出る放水の風情が固有な風物詩として人々を魅了している。

以上のように、満濃池は、巨大な堰堤の築造によって形成された広大なため池で、金倉川流域の地勢や遠くに望む大川山をはじめとする山並みとともに優れた風致景観を呈して觀賞上の価値が高く、また、近世から近代を通じて広く親しまれてきた名所的価値が高いことから、名勝に指定して保護するものである。

(『月刊文化財 第672号 令和元年9月号』より引用)



◆新指定の文化財・名勝・無形文化財  
写真3-1 『月刊文化財 令和元年9月号』表紙

### 第3節 指定に至る調査成果

#### 1 概要

満濃池は、香川県西部の丸亀平野を讃岐山脈より派生し北西に向かって流下する金倉川の上流域に所在するため池である。灌漑対象地域となる丸亀平野は、土器川と金倉川によって形成された沖積平野であり、主に古代より条里地割を基準とした大規模な耕地開発が行われてきたが、降雨や河川の恒常的な流量が少ないなどの当地方の気候・地理的条件を克服するために多くのため池が築造してきた。中でも満濃池は、歴史的経緯や規模等からみて、これらのため池を代表する存在である。

南方の讃岐山脈から派生した金倉川が形成した開拓谷の最狭部の一か所に対してアーチ式の土堰堤を構築する。現在の堰堤は、第三次嵩上げ事業(1940<昭和15>年～1958<昭和33>年)に竣工をみたもので、堤高32m、堤長155.8mを測り、土堰堤では珍しいアーチ式を探っている。この広大な土堰堤により造りだされた水面は、満水時面積約139ha、同貯水容量約1,540万m<sup>3</sup>という、農業用のため池では我が国第一の規模を誇っている。灌漑対象地域(受益面積)は、丸亀平野の丸亀市、善通寺市、多度津町、琴平町、まんのう町の2市3町からなる2,638ha(平成

29年度)に及ぶもので、香川県域耕地面積 30,800ha(平成28年度)の約1割に匹敵する農地を潤している。



写真3-2 満濃池 堤体全景(南東より)

## 2 沿革

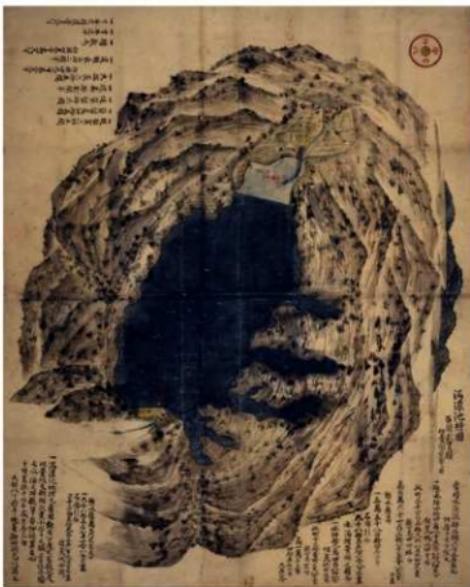
満濃池は「讃岐国萬濃池後碑文」(1020<寛仁4>年)によると、701~703年(大宝年間)に讃岐国守道守朝臣により築造され、818(弘仁9)年には破堤し3年を要して821(弘仁12)年に再築したとする。821(弘仁12)年の再築は、弘法大師空海が別当として指揮したことは著名である(「日本紀略」)。『今昔物語集』(12世紀前半頃)は「堤が高く海のように広くみえた」とするなど、古代の満濃池の様子をうかがい知ることができる。

821(弘仁12)年の再築後は、851(仁寿元)年、1184(元暦元)年に相次いで破堤したことが伝えられており、その後の中世には、史料上で1306(嘉元4)年に後宇多上皇院分国の公領として、1520(永正17)年には賀茂別雷神社(上鴨社)の社領として確認でき、再築が行われず耕作地として利用されたと考えられる。

江戸時代初期には、高松藩生駒家老西嶋八兵衛により、旱魃対策や石高増を目的として領内の治水事業が進められる中で、1628~1631(寛永5~8)年に再築された。その後の、1642(寛永16)年には、近隣の五条村、榎井村、苗田村はともに幕府領に封入され、苗田村に代官所が置かれ池の管理を担った。満濃池の維持管理には、腐食する木製の樋管を約30年毎に交換することが必要であり、1631(寛永8)年より1853(嘉永6)年の間には19回の普請が行われるなど、「水掛かり」の村々(灌漑受益の村々)を中心とした多くの賦役で維持がなされた。中でも、1849(嘉永2)年から1853(嘉永6)年の普請は、木樋を石樋へ交換する大掛かりな改修が行われたが、1854(嘉永7)年の大地震の影響によりあえなく破堤した。1854(嘉永7)年の破堤以降、

那珂郡金蔵寺村の豪商の和泉虎太郎や櫻井村庄屋であり池御料総代の長谷川佐太郎らが尽力し、岩盤を削り貫く「石穴」への改良が行われ、1870(明治3)年に再築が行われた。その後の池の管理は、1879(明治12)年に「水掛かり」の村々により設立された水利組織である「満濃池水利土功会」が担うことになり、1892(明治25)年には「満濃池普通水利組合」(現満濃池土地改良区)へ移管された。

満濃池普通水利組合は、堰堤第一次嵩上げ事業(1905(明治38)年～1906(明治39)年)、取水塔整備事業(1913(大正2)年～1914(大正3)年)、堰堤第二次嵩上げ事業(1927(昭和2)年から1930(昭和5)年)、堰堤第三次嵩上げ及び取水塔、余水吐改修事業(1940(昭和15)年～1958(昭和33)年)など整備事業を実施するなど、満濃池の維持管理に努め、現在に至っている。



資料3-2 満濃池絵図 天保八丁酉年 [1837(天保8)年]  
(香川県立ミュージアム所蔵)

### 3 名所としての満濃池の風景認識

#### (1) 広大なスケールに対する感嘆と畏怖

古代の満濃池の風景が記された史料としては、12世紀前半の成立が推定される説話集『今昔物語集』がある。『今昔物語集』(巻三十一 第二十二 讀岐國満農の池をくずしゝ國司の語)には、「今ハむかし、讀岐國那珂郡に萬濃池とて大成る池あり。其池大師其國の人を懲みて人を役して築たまへる池なり。池のまハリ遙に遠く堤はなはた高かりけれハ、池とハ覺へす。海などのやうに見えたり。廣さハかなたに居る人のかすかに見ゆるほとなれば思ひやるへし。」として、弘法大師空海の再築の事跡など由緒に加えて、池面が広く堤が高いこと、それゆえに池ではなく海のように見えるなど、満濃池の風景の広大なスケールが語られている。

同史料「卷二十 第十一 龍王、天狗のために取られたる語」においても、同様に満濃池の由緒と広大さが述べられているが、さらに「池の内底ひなく深けれハ大小の魚とも量なし。亦龍の棲としてありける。」として、池が深く大小の魚と龍(竜)の住処となっているという。竜は、仏教において雨神として請雨經典に竜王が説かれるものである。満濃池の重要な灌漑水源のため池としての機能を示す以外に、堰堤の高さや広大な水面などの人為を超えたスケールに対して、「竜が住む池」という形で感嘆や畏怖の念を表現したと考えられる。

このような満濃池の広大なスケールは、決壩時に引き起こされた洪水(災害)によって、とりわけ人々に畏怖の念を抱かせた。『今昔物語集』「卷三十一 第二十二 讀岐國満農の池をくずしゝ國司の語」では、讀岐國司の悪行として、池の魚を獲るために堰堤に穴をあけて落水を行ったことで決壘を招き、国中の人家や田畠を押し流したことを伝え、幕末から明治初頭に成立した地誌『讀岐國名勝図会』(巻十一 那珂郡上)では、1854(嘉永7)年の大地震による決壘による洪水が、金毘羅の門前を押し流し、流末が丸亀城下まで押し寄せ「あな恐ろしの水勢や」という。

江戸時代には、木製の底橋の定期的な伏替(交換)に伴い、大規模な修復工事である「搖替普請」が行われ水掛かり(灌漑受益)の村々の大きな負担となつたが、広大な堰堤のスケールを再認識させたとともに、決壘がもたらすであろう洪水(災害)への畏怖を懐かせる機会にもなつていたと考えられる。

## (2) 固有の周辺環境と一体的に捉える視座

安定的な維持が図られた江戸時代の満濃池は、地誌において名所として盛んに喧伝された。1677(延宝5)年に成立した讀岐の名所などを集めた『玉藻集』を先駆けとして、『讀岐回遊記』(1799<寛政11>年)、『全讀史』(1828<文政11>年)、『金毘羅山名勝図会』(1804~1818年<文化年間>)と『讀岐國名勝図会』(幕末~明治初)など、多くの地誌において名所として取り上げられた。これらの地誌類には、「方一里餘の池」(讀岐廻遊記)、「當國第一の池」(讀岐國名勝図会)



資料3-3 象頭山八景 満濃池遊鶴  
[1845(弘化2)年]



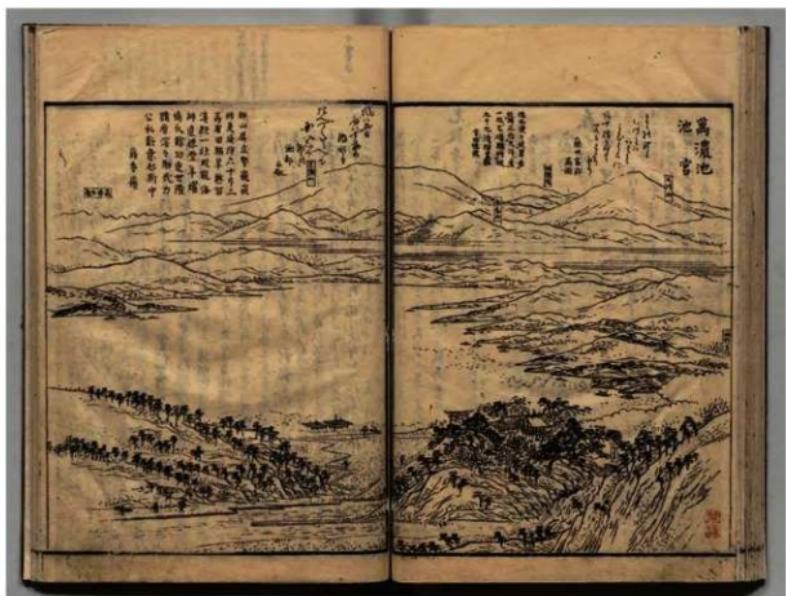
資料3-4 満濃池御普請所絵図[1848-1854年  
(嘉永年間)](香川県立ミュージアム所蔵)

など、先述した通り古代より語られてきた満濃池の広大なスケールや、歴史的な由緒を示す弘法大師空海や西嶋八兵衛の事跡が語られている。さらに、堰堤や水面のみならず周囲の丘陵や背後の大川山(標高1,042m)などの讃岐山脈などを含めた固有の自然環境と一体的に捉える視座を読み取ることができる。例えば『金毘羅山名勝図会』には次のような記載がみられる。

此地南の方大山といふより、此方多くの山にて左り右に廻りきたりて、其山々谷によりおつる水を、野の方山の端のさし向ひたる山内四十間はかりの處に築き、其内を池としたる故の名にて、門内の池と云るにはあらぬと。水源は千山聲、屏風を立たるかことく、萬谷より地腋を垂れ、池水常に堪へ、池のまはりはるかに遠く堤高ければ、池とは更には見へず、湖水のやうにそ見かけて、廣さはかなたにある人のかすかに見え、野飼の馬は鳥とみゆるほど也。水洋々として百灘のことく、萬山影を逆しまに摸し、松柏草森々として谷を藏し、雲朦朧として恒に順雨を施し、萬(漫)々たる靈水峩々たる岸をあらそひ、水鳥鯉鮎は驚衝にまひ遊ふ。樋矢倉は番次竝ふ。水流千筋に別て、田圃の料とし、堤に大師勧請し給ふ處の社有。されはかゝる大池なれば、四季つねになかめ有て、春の彌生は土人池見とて、小竹割子やうのものを携、朱のかもを敷たるさまは、山つゝしの色をうはひ、いと竹の秘曲は山谷にこたまして、夕陽をかきりてうちつかへれる。寛に山水勝地風色の名池なり。(金毘羅山名勝図会 萬農池)



資料3-5 金毘羅山名勝図会〔1804-1818年(文化年間)〕写本  
(個人所蔵、画像提供香川県立ミュージアム)



資料3-6 讚岐国名勝図会 萬濃池 池宮 [1854(嘉永7)年]  
(国立公文書館所蔵)

さらに、このような固有の環境を捉える視座のもと、誌文や挿絵に共通してみられる構図から、主に次の4点により構成される風景が広く定着していたことがわかる。

- A 巨大な堰堤(※放流施設(余水吐)、池宮(現神野神社)などの宗教施設)
- B 南北で変化に富んだ池岸と広大な池面
- C 池周を囲むなだらかな丘陵地
- D 屏風絵のように奥に屹立する急峻な讃岐山脈の山容

Aの堰堤は、巨大な人為物としての満濃池を成り立たせる根幹となる構築物であり、滝のような描写が行われる余水吐や宗教施設の池宮は、構造上・信仰上の存在のみならず、堰堤や池面と対比させることにより、これらの広大なスケールを際立たせている。Bの南北の池岸は、地質的な要因により、複雑に入り組む南岸と直線的な北岸で対照的な在り方を示し、変化に富んだ風景を演出している(第2章第2節参照)。Cの池面周囲のなだらかな丘陵地は、堤体の機能を果たす以外に、Dの背後の急峻な讃岐山脈に対して前置されることで、遠近感(奥行き)を強調している。Dの背後の讃岐山脈のうち、山頂が尖った大川山には、732(天平4)年の大旱魃に讃岐国司が祈雨を行った伝承をもつ大川神社が鎮座している。これらの山名は、近世の地誌

の挿絵にも注記されるものであり、池の奥地は水源や祈雨の空間として認識されていたのだろう。これらは主に堰堤から南東方向への視線において認識されるものである。また、先述の『金毘羅山名勝図会』で紹介された、朱氈を敷き弁当を広げ、池見を行っていた場所は堰堤上面と推察され、この場所からの眺めは、満濃池の風景の観賞上極めて重要である。

### (3)歴史的・社会的価値

満濃池は、古代における築造から決壩、中世における空白期を経て近世初頭の再築と決壩、近代初頭における再築など、築造から現代までの長期間にわたる固有の歴史をもっている。また、築造以来、一貫して広大な地域の水田を潤す一大灌漑施設として重宝されてきた。これらは歴史的・社会的価値として古来から広く共有され、満濃池の風景に無形の要素として彩を添えてきた。

中でも、821(弘仁 12)年の弘法大師空海による修築と 1631(寛永 8)年の西嶋八兵衛の再築は絶えず語られるものである。『今昔物語集』(巻三十一 第二十二 讀岐國満農の池をくずしゝ國司の語)では「高野ノ大師ノ、其ノ国ノ人ヲ哀マンガ為ニ、人ヲ催テ築給ヘル池也」、「其ノ池築テ後不頬レズシテ久ク有ケレバ、其ノ国ノ人田ヲ作ルニ、旱魃スル時ナレドモ、多ノ田此ノ池ニ被助テ有ケレバ、國ノ人皆喜ビ合ヘル事無限シ」とするように、民衆に広く慕われた弘法大師空海を開祖として位置付けている。また近世地誌では、弘法大師築堤の説話と共に西嶋八兵衛の事跡が盛んに語られている。

821(弘仁 12)年の弘法大師空海の修築に伴って創建された由緒をもつ神野寺は、その後は廢れていたが、1932(昭和 7)年から 1934(昭和 9)年には空海誕生千百年祭の記念事業が行われ、堰堤左岸の丘陵に神野寺が再興されるとともに、1933(昭和 8)年には同寺境内東側に弘法大師銅像が建立された。弘法大師空海に対する信仰は現在も脈々と受け継がれ、満濃池の風景を語るうえで欠くことができない存在となっている。

### (4)近代以降の風景認識の変容と継承

1870(明治 3)年の再築後は、食糧増産や相次ぐ干ばつの対応など灌漑用水の安定的な確保という社会的価値の強化が求められ、古代から近世までの度重なる決壩と修築を乗り越えるべく、堰堤の嵩上げによる貯水量増加を中心とした物理的構造の強化が図られた。

満濃池の管理や配水管理組織として 1879(明治 12)年に設立された満濃池水利土功会は 1892(明治 25)年に満濃池普通水利組合(現満濃池土地改良区)へ改組され、1894(明治 27)年、1903(明治 36)年、1904(明治 37)年と相次いで発生した大規模な干ばつにより、1905(明治 38)年から 1906(明治 39)年に堰堤の第一次嵩上げ事業を行った。1913(大正 2)年から 1914(大正 3)年には、従来の木製の取水櫓と斜櫓などに代わってモルタル煉瓦積みという当時の最新の工法をもつ取水塔が整備された。

さらに、1924(大正 13)年の大規模な干ばつを契機として、1927(昭和 2)年から 1930(昭和 5)年にかけて堰堤の余水吐の拡張などの第二次嵩上げ事業が実施され、1940(昭和 15)年

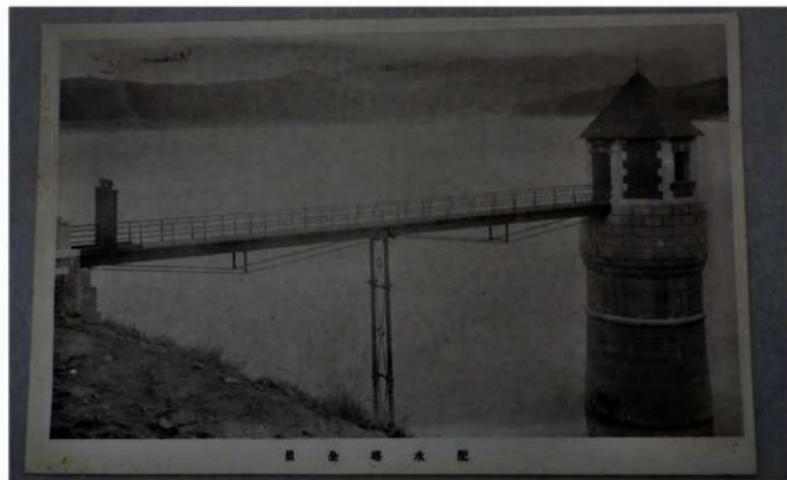


資料3-7 讀岐写真帖 [1916(大正5)年]  
(香川県立ミュージアム所蔵)

からは、戦時中の中断を挟んで1958(昭和33)年まで堰堤の嵩上げや取水塔改良を目的とした第三次嵩上げ事業が行われた結果、堤高32m、堤長155.8m、貯水容量は1,540万m<sup>3</sup>となり、幕末の1854(嘉永7)年の堤防の決壊をうけた1870(明治3)年の再築時の規模(堤高十三間(23.66m)、貯水容量584万6,000m<sup>3</sup>)と比べて約3倍の貯水容量を誇ることになった。

近代以降のこれら一連の改築事業による物理的構造の変化と共に、満濃池の風景認識もまた変化していった。1914(大正3)年に竣工し「赤レンガ取水塔」と呼ばれた赤い三角屋根と円筒形のモルタル煉瓦積みの取水塔をはじめとする土木構造物や、池面の平面形状等、個別の要素に焦点を当て切り取った風景が、満濃池の風景として愛でられるようになっていった。

このように、名所として満濃池が喧伝され定着した近世後期に広く共有された満濃池の風景認識は、特に固有の周辺環境と一体で捉える視座に近代以降変化がみられるが、古代より連続と継承されてきた広大なスケールや歴史的価値・社会的価値への認識は普遍的なものとして継承されている。これらの認識が時代と共に積み重なり、満濃池の風景は重層的かつ豊かなものとなっている。



資料3-8 香川県営満濃池竣工記念絵葉書〔1927(昭和2)年〕(丸亀市立資料館所蔵)



写真3-3 ゆる抜きを見物する観光客

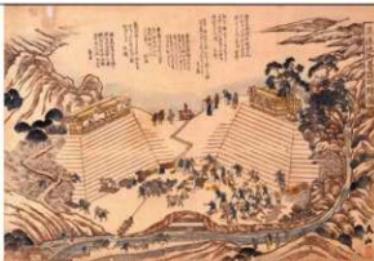
## 第4章 本質的価値と構成要素

### 第1節 名勝満濃池の本質的価値

名勝満濃池の本質的価値は、大きく分けて以下の3つの観点にまとめることができる。

#### 巨大な堰堤の築造により形成された広大なため池

満濃池は大宝年間(701~704)の築造後、821(弘仁 12)年の弘法大師空海による再築を経て、破堤と再築を繰り返し、1300年以上の歴史を重ねてきた。巨大な堰堤は広大な水面を造り出し、これらの雄大さの認識は古代から現代へ発展的に継承されている。



資料4-1 満濃池御普請所絵図(嘉永年間)  
香川県立ミュージアム所蔵

#### 水面が流域の地勢や山並みと一体となる風致景観

満濃池の堰堤上から南東への眺望は、広大な水面を中心として、北岸の緩やかな池岸、南岸の複雑に入り組んだ池岸、なだらかな丘陵の遠景に聳え立つ讃岐山脈の山容が一体化し、広がりと奥行きのある、優れた風致景観を成している。



写真4-1 満濃池と讃岐山脈遠望  
撮影：廣瀬孝善

#### 近世から近代を通じて広く親しまれてきた名所

満濃池の風致景観は、由緒を示す多くの事跡とともに、近世地誌の挿絵や詩文で繰り返し紹介され名所として観賞されてきた。近代以降は取水塔や橋門などの施設が新たな見どころを添え、ゆる抜きの風物詩なども広く親しまれてきた。



資料4-2 讃岐琴平名所絵葉書(昭和初期)  
香川県立ミュージアム所蔵

## 第2節 満濃池の風景の構成と構成要素

### 1 風景の構成

近世幕末の地誌などで愛でられた満濃池の風致景観は、第4-1図に示すとおり、広大な人為物のため池と固有の地形・地質および植生などの自然環境の一体化に求めることができる。

その構成は、金倉川が形成した谷戸の狭窄部に設けられた堰堤と広大な水面を中心として、周囲の三豊層で形成された低丘陵の背後には、江畠砂礫層で構成された、五毛地区を中心とする丘陵と、その背後に大川山を擁する讃岐山脈が屹立している。周囲の低丘陵は、固結度の違いにより、直線的な北岸と漫食が進み複雑に入り組んだ南岸で対照的なあり方を示し、背後の山容は五毛地区に所在する江畠断層を境にして急峻に立ち上がることで、屏風絵のような背景を成す。



第4-1図 名勝満濃池の風致景観構成

これら風景の構成は、近世幕末の地誌の挿絵において鳥瞰図的に描かれるものであるが、実際的な観賞においては、堰堤を視点場として南東方向への眺望においてみることができるものである。現在の堰堤は1958(昭和33)年に竣工した第三次嵩上げ工事によるもので、付属施設には左岸側の取水塔と樋門(登録有形文化財<建造物>平成12年2月登録)、右岸側には余水吐(流入部・出水口)がある。堰堤上及び周辺には、「真野池碑」や「松坡長谷川翁功德碑」をはじめとした1870(明治3)年の再築以来多くの顕彰碑が建立されている。

堰堤を挟み両岸の丘陵上には、弘法大師空海創建の由緒をもつ神野寺境内(左岸側上)、満濃池の守護神である神野神社(右岸側上)が対峙し、その中央の水面にはかつての堰堤右岸側の取り付きの丘陵のなごりであり弘法大師空海の護摩焚きの場の伝承をもつ「護摩壇岩」がある。毎年6月15日の「ゆる抜き」と呼ばれる放水行事は、関係者の神野神社と神野寺での豊水祈願を行った後に取水塔で開門が行われる。

このように、堰堤及び周辺には、取水塔などの付属施設以外にも近代以降の履歴を示す顕彰碑などの記念物、神野神社や神野寺など精神性を示す施設がまとまっており、この地が枢要なる場所であることを示している。

## 2 構成要素の分類

満濃池の風致景観は、広大な人為物であるため池と地形・地質など周囲の固有の自然環境が一体化したものであることを踏まえた上で、本計画の保存活用上の対象となる要素について、名勝指定地域内と指定地域外に区分し、以下および第4-1表のとおり分類する。

### (1) 指定地域内

#### ア. 本質的価値を構成する要素

満濃池の風景を構成する枢要な要素である。人為物としてのため池を構成する堰堤及び取水塔、樋門、水面をはじめとして、自然環境として周囲の池岸と丘陵が含まれる。堰堤には、現在の堰堤下に埋没・保存されている第三次嵩上げ工事(1940<昭和15>年～1959<昭和34>年以前の旧堰堤を含む。

また、旧堰堤の右岸側の取り付き部のなごりであり、弘法大師空海による護摩焚きの伝承をもつ護摩壇岩や周囲の丘陵の植生についても、歴史上及び観賞上、重要な位置を占めるため、本要素に含める。

#### イ. 本質的価値に関連する要素

本質的価値の理解を補助する要素である。満濃池の沿革を示す再築及び修築事業に伴う記念碑、顕彰碑や、由緒を持つ維持管理上の祈念施設である神野寺や神野神社が該当する。

#### ウ. 保存活用に資する要素

遊歩道や説明版、誘導標、東屋等を指す。町立の研修施設であるかりん会館には、満濃池に関する展示スペースが設けられていることから、本要素に含める。

また、指定地域の北岸東側は国営讃岐まんのう公園、南岸西側は香川県満濃池森林公園の公園区域と重複することから、これらに関しては本要素として取り扱う。

#### エ. その他の要素

本質的価値に含まれないが、風景の観賞に影響を与える現代の建築物や土木構造物、その他工作物、道路敷(県道・町道)を指す。

### (2) 指定地域外

#### ア. 本質的価値に関連する要素

指定地域外の他の地区に所在するが、満濃池の風景を代表する堰堤から南東方向への観賞において、その背景となる大川山地区や五毛地区などの山並みを指す。

#### イ. 保存活用に資する要素

指定地域に隣接及び周辺に存在する国営讃岐まんのう公園、香川県満濃池森林公園などの公園施設を指す。これらは、活用において密接に関連する施設である。

## (3) 本質的価値の背景を構成する要素

土地(不動産)に関わるものではないが、満濃池の沿革や風景の観賞を理解する上で必要な地誌、絵図、絵葉書などの有形の要素や、毎年6月15日前後に開催される「ゆる抜き」行事や開祖としての弘法大師空海信仰など、無形の要素を指す。

第4-1表 名勝満濃池の構成要素の分類表

分類		構成要素
指定地域内	本質的価値を構成する要素	<input type="radio"/> 堰堤 <input type="radio"/> 水面 <input type="radio"/> 池岸と丘陵の地形 <input type="radio"/> 植生 <input type="radio"/> 堰堤からの眺め <input type="radio"/> 取水塔 <input type="radio"/> 樋門 <input type="radio"/> 余水吐(流入部) <input type="radio"/> 余水吐(出水口) <input type="radio"/> 護摩壇岩
	本質的価値に関連する要素	<input type="radio"/> 神野寺境内 <input type="radio"/> 弘法大師空海像 <input type="radio"/> 神野神社境内 <input type="radio"/> 真野池記 <input type="radio"/> 松坡長谷川翁功德之碑 <input type="radio"/> 修拓記念碑 <input type="radio"/> 満濃池配水塔顕彰碑 <input type="radio"/> 県営満濃用水改良竣工記念碑
	保存活用に資する要素	<input type="radio"/> 国営讃岐まんのう公園の名勝指定地域内区域 <input type="radio"/> 香川県満濃池森林公園の名勝指定地域内区域 <input type="radio"/> 各種サイン(説明板・誘導標・注意標) <input type="radio"/> 遊歩道(四国のみち、周遊道、デッキ) <input type="radio"/> 多様な視点場 <input type="radio"/> 以便施設(かりん会館、東屋、やぐら、トイレ、駐車場、岬の桟橋)
	その他の要素	<input type="radio"/> 道路敷(県道、町道、管理道) <input type="radio"/> 建築物(倉庫、かりん亭、物産館、住宅、小屋、神野神社御旅所) <input type="radio"/> 石碑(歌碑、記念碑)※現代のもの <input type="radio"/> 土木構造物(水路、護岸擁壁、橋) <input type="radio"/> 工作物(看板、案内板、説明板、柵、フェンス、ガードレール、電柱、電線、屋外広告物、道路標識、カーブミラー、街灯、国旗掲揚台、花壇、監視カメラ、水門、自動販売機、スピーカー)
指定地域外	本質的価値に関連する要素	<input type="radio"/> 讃岐山脈の山並み(五毛地区、大川山地区)
	その他の要素	<input type="radio"/> 国営讃岐まんのう公園の名勝指定地域外区域 <input type="radio"/> 香川県満濃池森林公園の名勝指定地域外区域 <input type="radio"/> ほたる見公園(町営)
本質的価値の背景を構成する要素		<input type="radio"/> 有形の要素(地誌、絵図、絵葉書、絵画) <input type="radio"/> 無形の要素(ゆる抜き行事、弘法大師信仰)

### 3 各要素の概要

本節では、本質的価値を構成する要素など、保存活用上、主体となる要素について説明し、第4-2図にその位置を示す。その他の要素については、第5章で地区ごとに詳述する。

#### (1) 本質的価値を構成する要素

##### ・堰堤

満濃池の堰堤は、取水源である金倉川が平野部へ流れ出る峡谷を堰き止め、満濃池を成り立たせている巨大な構造物である。満濃池堰堤には度重なる破堤と修築の歴史があり、弘法大師空海が関わった大宝年間の事績は特に著名である。現在の堤体は、1958(昭和33)年に完了した第三次嵩上げ工事によるもので、旧堤体の下流側法面を埋める形で嵩上げされ、堤高32m、堤長155.8m天端幅約20mを測る。堰堤の構造は、「土堰堤」という土造りでありながら、平面形が曲線となる「アーチ形式」を採用した全国的にも極めて珍しい構造をもつ。ゆるやかな曲線を描いて裾を広げた形状は、重厚かつ圧倒的な存在感を誇示している。



写真4-2 堰堤 北より

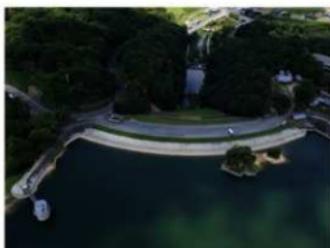


写真4-3 堰堤 南東より



写真4-4 堰堤 西より

### ・水面

満濃池の水面は史資料に「海と見まごう」などと表現されたように、広大な満濃池を象徴するものである。満濃池は嵩上げによって拡大してきた歴史があり、現在の水面は第三次嵩上げによってなされたものである。満水面積 138.5ha の広大な水面は、貯水量 1,540 万m<sup>3</sup>の水を満々とたたえている。満濃池は灌漑施設として築造された農業用ため池であることから、放流操作や降雨条件によって水位が変動し、池岸の風景に変化をもたらす。満濃池の澄み切った水面は、晴天日が多い讃岐の空や周囲の丘陵の植生を映し出す。初夏は新緑、盛夏は紺碧、晩秋は錦色、大寒は鼠色に四季とともに変化していく。また、夜明けから夕暮れまでの時間帯や気象条件、地点によって表情を変え、来訪者を魅了している。



写真4-5 晴天の満濃池



写真4-6 秋空と満濃池



写真4-7 晩秋の満濃池



写真4-8 満濃池の夕暮れ

### ・池岸と丘陵の地形

広大な水面の周囲にはなだらかな丘陵地があり、池岸の形状は地質条件により北岸と南岸で異なっている。水面周囲の丘陵は「三豊層」と呼ばれる約120～210万年前の堆積層からなるが、北岸と南岸では層内の粒度構成が異なっている。南岸はシルト～砂層を主体としているために浸食を受け易く、複雑に入り組む池岸となる一方で、北岸は上部が硬質な砂礫層に覆われているために浸食が進まず直線的なものとなるなど、池岸の地形は対照的なものとなっている。『讃岐国名勝図会』等の詩文にみえる複雑に入り組む南岸の「八十嶋」の表現は、海にも見える広大な水面との対比により用いられたと考えられる。対照性をもつ周辺の地形により、水面の規模や奥行きが強調されることで、幽遠な風致景観が造り出されている。



写真4-9 満濃池南岸 北西より



写真4-10 満濃池北岸 東より

### ・植生

満濃池周辺の植生は、自然豊かな満濃池の風致景観の一部を成す重要な構成要素である。また、一部植栽されたヤマツツジやヤマザクラ等は、近世・近代を通じて詩歌に詠まれ、満濃池の名所としての魅力を高めてきた。

近代以前の満濃池周辺の植生はマツ林(アカマツ林)であり、『讃岐国名勝図会』(幕末～明治初)などの近世地誌の挿絵にもその様子が描かれた。一方、1980年代以降は、マツクイムシの被害が拡大し、アカマツ林は池岸や周囲の丘陵稜線上の一部に残るのみとなった。その中にあって護摩壇岩ではアカマツが自生している。現在、満濃池周辺の全体植生は、コナラ、アベマキ等の落葉広葉樹やアラカシ、クスノキ、ソヨゴ等の常緑広葉樹が優占する広葉樹林に遷移しており、また、近年、満濃池の南岸を中心に竹林の管理放棄による拡大が見られる。



写真4-11 広葉樹林に遷移するアカマツ

・堰堤からの眺め

堰堤上から南東方向への眺望は、護摩壇岩と取水塔を左右に対峙させ、中央に広大な水面が開ける。池岸の形状は地質を反映して、北岸は緩やかな曲線、南岸では複雑に入り組んだ峡谷を刻み対照を成す。池の周囲の丘陵地がなだらかな稜線をもつてのに対して、背後の大川山などの讃岐山脈は、断層を境にして屹立する。古代から継承されてきた広大な人為物のため池と対照性を有する周囲の自然環境が一体化した幽遠な風景を観ることができる。この風致景観の観賞は、由緒を示す多くの事跡とともに近世地誌の挿絵や詩文において喧伝され、定形化したものである。

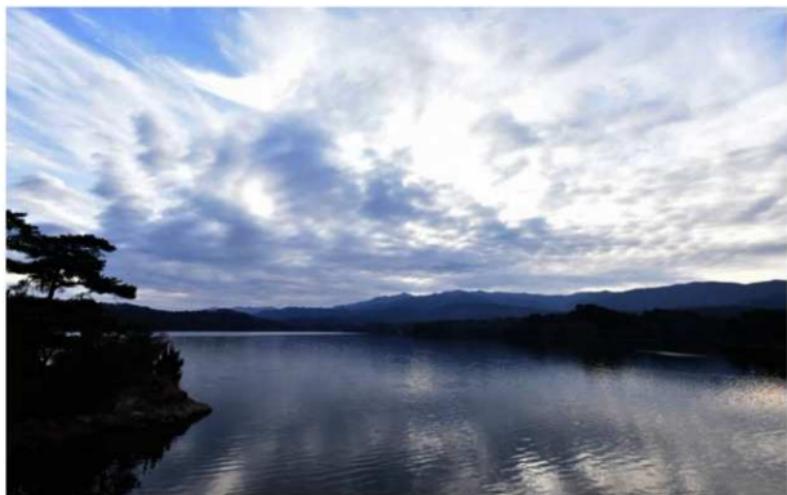


写真4-12 堰堤より南東を望む(遠方に大川山)



写真4-13 堰堤と水面 西より



写真4-14 護摩壇岩と取水塔 北より

### ・取水塔

満濃池からの取水は木製の「ゆる(池の取水栓)」を大人数で抜く方式であったが、樋門を開き取水塔から取水する仕組みに変化した。第一次嵩上げ工事に伴い1914(大正3)年に竣工した取水塔は、モルタル煉瓦積みの「赤レンガ取水塔」と称され、取水塔を含む景観が絵葉書や写真などで多く取り上げられ、満濃池の特徴的な景観として広く普及した。現在の取水塔は第三次嵩上げ工事に伴い1955(昭和30)年に竣工した高さ30.0mのコンクリート製で、堤体左岸と渡塔橋によって連結している。現在の取水塔も多くの写真や絵画に取り上げられ、満濃池を象徴する構図の一つとして定着している。



写真4-15 満濃池取水塔



写真4-16 赤レンガ取水塔

### ・樋門

満濃池樋門は、満濃池の底樋隧道からの出口である。第三次嵩上げ工事(1940<昭和15>～1958<昭和33年>)に伴うものであり、事業写真によると1951(昭和26)年頃には竣工していたことが確認される。樋門は石造で、幅5.3m、高さ4.485m、樋管幅1.2mを測る。底樋の坑口周りに五角形の迫石(坑口アーチ部分を支える石)を用い、石造りのコーニス(帯状装飾)、袖壁、柱頭付端柱で抗門を飾っている。現在の底樋は、その後の嵩上げ工事で197mまで延長されている。岩盤を利用した底樋と、坑門が堅固で美しい建造物であるといった特徴が評価され、2000(平成12)年に国の登録有形文化財となっている。毎年6月15日前後に行われる、ゆる抜きの際には勢いよく池水が放出され、讃岐の初夏を彩る風物詩となっている。



写真4-17 満濃池樋門



写真4-18 底樋隧道掘削工事の様子

### ・余水吐(流入部)

余水吐とはため池の余剰の水が堤防を越流することを防ぐため、下流に向けて放流する目的で設けられる放流設備である。満濃池の余水吐は明治まで堤防の西端にあり、余水吐流入部に流入した余水が川のような水路により下流側へ排出されていた様子が絵図に描かれてきた。1914(大正3)年の第一次嵩上げ工事に伴い、現在と同じ堤防の東端に移設された。1958(昭和33)年の第三次嵩上げ工事において岩盤に隧道を穿ち、暗渠によって余水吐出水口と連結する方式となった。満濃池が満水となり、さらに水位が上昇すると余水吐流入部に轟音をあげて滝のごとく流れこむ水流を見ることができる。



写真 4-19 余水吐へ流入する池水



写真 4-20 余水吐流入部から暗渠へ注ぐ

### ・余水吐(出水口)

昭和33年の第三次嵩上げ工事で建設された。一般的なため池では出水口はコンクリート製の水路となっているが、満濃池は水路床にコンクリートが打設されておらず、岩盤がそのまま露呈している。水路床に凹凸があるため、余水の水勢が強いと激しい乱流となり滝のようにみえる現象が現れる。これを地元では「幻の滝」と呼称している。「幻の滝」を見る能够の日は満濃池が満水かつ一定以上の流入量がある場合であるが、満濃池が満水となるのは年平均30日以下であるため、幻の滝の発生頻度はさらに少なく、極めて希少な現象であるといえる。



写真 4-21 余水放水の様子



写真 4-22 余水吐出水口の水路床

#### ・護摩壇岩

堤体中央付近の水面に、弘法大師空海が821(弘仁12)年の修築に際し、護摩壇を設けて修法を行ったと伝承される場所があり、護摩壇岩と呼称されている。満水時には池中の島となるが、第三次嵩上げ工事以前は堰堤を見下ろす山上であり、現在はマツなどの樹木が繁茂している。1932(昭和7)年には空海を讃える歌碑が建立された。満濃池での弘法大師空海の事績を偲ぶ場所であるとともに、堤体からの景観のアクセントとなる護摩壇岩は、満濃池を代表する景観として近年多くの写真や絵画に登場する。

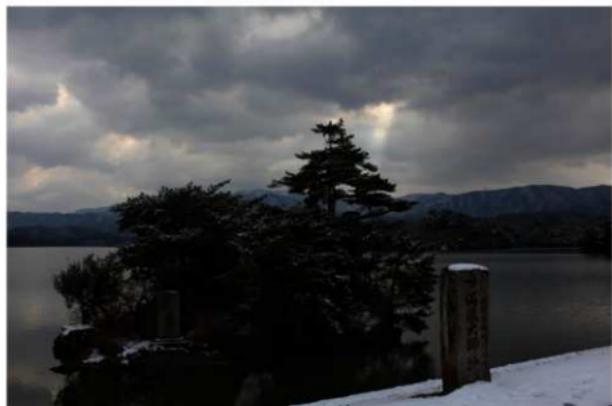


写真4-23 雪の護摩壇岩



写真4-24 護摩壇岩から水面を望む

## (2) 本質的価値に関連する要素

## ・神野寺境内

堤体左岸の丘陵に所在する神野寺は、山号は五穀山と号す真言宗善通寺派の寺院であり四国別格二十霊場の第十七番札所である。寺伝によると弘法大師空海により821(弘仁12年)年に満濃池守護の道場として創建されたと伝わる。神野寺は、1584(天正12年)に土佐國の長宗我部元親の軍兵によって焼き払われた後は再興されることなく荒廃したままであり、讃岐国名所図会においては「神野寺跡」として紹介されている。現在の堂宇は1932(昭和7年)から1934(昭和9年)年にかけての「空海誕生千百年祭」の記念事業として再興され、第三次嵩上げ工事に伴い現在の位置に移された。神野寺南側の池岸には、四国遍路の写し靈場(ミニ八十八ヶ所)がある。設置年代は不明ながら、神野寺の再建と同様に1932(昭和7年)から1934(昭和9年)にかけての記念事業で整備され、1953(昭和28年)の神野寺移転とともに現在の位置に設置されたと考えられる。神野寺境内には桜、アジサイ、モミジなどの季節を彩る木々が植栽され、四季を通じて四国遍路参拝客や、満濃池を訪れた人々の眼を楽しませている。例年6月15日前後に行われるゆる抜きの際には、神野寺堂内で護摩焚法事が行われている。



写真4-25 五穀山神野寺



写真4-26 四国遍路の写し靈場

## ・弘法大師像

神野寺境内東側には、1933(昭和8年)に「空海誕生千百年祭」記念事業の一環で満濃大師会により建立された青銅造の弘法大師像が立つ。像高は約3.3mの青銅造で、長めの衲衣をまとい、右手に五鉢杵、左手に長数珠を持ち、高さ約3mの台座上から満濃池を見下ろす。製作は香川県出身の小倉右一郎であり、落成時には満濃大師会から記念絵葉書が出されている。

現在も神野寺を訪れた参拝者が多く訪れ、弘法大師像と同じ場所から雄大な満濃池の風致景観を味わっている。



写真4-27 弘法大師像

### ・神野神社境内

神野神社は、満濃池の守護神として奉斎された延喜式内讃岐二十四社の一つに数えられた古社である。神野神社は「讃岐国名勝図会」によれば「池乃宮」に万濃池神、神野神、加茂神が祀られ、左岸側(西側)の旧堰堤上に鎮座していた。明治以降に満濃池修築の功労者である松崎渋右衛門、長谷川佐太郎、和泉虎太郎、軒原庄蔵を合祀し、第三次嵩上げ工事に伴い、1953(昭和 28)年に現在の位置に移転した。境内には 1470(文明 2)年の銘をもつ石鳥居がある。毎年 6 月 15 日前後に行われるゆる抜きの際には、神野神社拝殿で満濃池土地改良区理事長をはじめ、関係者一同が出席し神事が執り行われる。



写真 4-28 神野神社と鳥居



写真 4-29 堰堤上(西詰)の旧神野神社

### ・真野池記

幕末に決壊した満濃池が1870(明治3)年に再築された際、これを記念して1875(明治8)年9月に建立された石碑である。碑文の内容は、前文で平安時代初期における空海の満濃池再築の業績に触れ、さらに江戸時代初期における生駒藩主高俊の家臣西嶋八兵衛による再築をたたえている。続いて嘉永年間(1848~1854)の石造樋管工事の失敗による1854(安政元)年の決壊と、これに伴う被害のありさまを述べている。後半ではこの復旧にかかわった高松藩主松平頼聰と、復旧に奔走し底樋の石穴方式を推進した執政松崎済右衛門の功績をたたえている。この石碑は矢原正敬の撰文、題額は正敬の染筆、碑文の染筆と碑の建立は正敬の子息正照である。高さ約2.7m、幅約1.4m。

### ・松坡長谷川翁功德之碑

前述の真野池記と同じく、満濃池の修築に功績のあった長谷川佐太郎の顕彰碑である。1931(昭和6)年に建立。高さ約3.9m、幅約2.1m。



写真4-30 真野池記



写真4-31 松坡長谷川翁功德之碑

#### ・修拓記念碑

満濃池普通水利組合が、昭和5年に完成した満濃池の第二次嵩上げ工事を主体とした「県営満濃池用排水改良事業」の竣工を記念して、昭和6年に建立。高さ約2.2m、幅約1.3m。

#### ・満濃池配水塔顕彰碑

満濃池普通水利組合が、大正3(1914)年に完成した満濃池新配水塔を記念して昭和6年建立。台座の赤煉瓦は旧配水塔の外壁に使用していたもの。石碑の高さ約1.8m、幅約1.1m。台座の高さ約1.2m、幅約1.5m。

#### ・県営満濃用水改良竣工記念碑

香川県が第三次嵩上げ工事の竣工を記念して昭和36年4月に建立。題字は坂出市出身で参議院議員・防衛庁長官を勤めた故津島寿一、撰文は当時の香川県知事金子正則。下部には池の沿革と規模が刻まれている。高さ約3.7m、幅約1.6m。



写真4-32 修拓記念碑



写真4-33 満濃池配水塔顕彰碑



写真4-34 県営満濃用水改良竣工記念碑



第4-2図 名勝満濃池の主要な構成要素位置図

## (3)保存活用に資する要素

指定定地域内で池の北岸東側は国営讃岐まんのう公園、南岸西側は香川県満濃池森林公園の区域となっている。国営讃岐まんのう公園(1998<平成10>年開園)では丘陵頂部に展望デッキ、池岸に体験学習施設が設けられる。香川県満濃池森林公園(1988<昭和63>年開園)は、「桜の森」や「野鳥の森」等の散策道があり、野鳥観察小屋・トイレなどの便益施設が整備されている。金倉川下流側では指定範囲外に所在するほたる見公園(町営、1990<平成2>年開園)から、樋門付近まで遊歩道と堰堤下流側のデッキが整備され、毎年6月のゆる抜き行事では、多くの観光客がデッキより樋門放水の様子を見学している。かりん会館(町営、1990<平成2>建築)は、旧樋の部材(木製・石製)や満濃池に関する歴史資料を展示しており、ガイダンス機能を担うとともに、周辺部に展望用の園地整備が行われている。



写真4-35 国営讃岐まんのう公園展望デッキ  
東より



写真4-36 香川県満濃池森林公園桜の森  
東より



写真4-37 かりん会館 東より



写真4-38 堰堤下流側のデッキ 南西より

## (4)本質的価値に関連する要素(指定地域外)

満濃池の風景の本質的価値である堰堤から南東方向の眺めにおいては、背後に聳える讃岐山脈の山並み(五毛地区・大川山地区等)が構成要素となっている。これらは、指定地域外(その他の地域)となるが、保存活用上、指定地域と一緒に捉えていく必要がある。

讃岐山脈の山並みは、中央構造線の横ずれの断層運動に伴って約250~100万年前に活動した江畑断層を境にして礫岩・砂岩・泥岩を主体とした和泉層群の隆起に伴って形成された東西南

向の山地である。堰堤から南西方向の眺望では、3列に分かれて階段状に隆起するとともに、浸食が進む山腹には幾重もの開析谷が形成されるなど、変化に富んだ風景を醸し出している。

この中でも大川山(標高 1042m)は頂部付近が尖る山容をもち、堰堤からの眺めにおいて中央に据えられるものであり、山頂部には 732(天平 4)年の大旱魃に讃岐国司が祈雨を行った伝承をもつ大川神社が鎮座する。

讃岐山脈の山名は、近世の地誌の挿絵にも注記されるものであり、池の奥地は水源や祈雨の空間として認識されていたと考えられ、満濃池の風景の保存活用上、重要な位置を占めている。



写真4-39 満濃池背後の讃岐山脈の山並み 西より

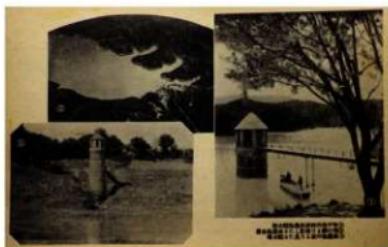
#### (5)本質的価値の背景を構成する要素

有形の要素として、満濃池の再築や修築などの沿革に関わる絵図や、風景に対する見方や評価を与えた幕末を中心とした地誌、近代の嵩上げ工事や名所案内の絵葉書などの史資料は、土地(不動産)に関わるものと同様に、満濃池の価値を理解する上で、有形の要素として由緒付けや味わいを醸し出すなど背景を構成するものである(資料 4-3、第 4-2 表、第 4-3 表)。

無形の要素としては、満濃池の開祖として位置付けられてきた弘法大師空海に関わる信仰や、毎年 6 月 15 日前後に開催されるゆる抜き行事がある。弘法大師空海の信仰は、1933(昭和 8)年の空海誕生千百年を記念した銅像の建立や、1934(昭和 9)年の神野寺の再興など、現在も継続している。ゆる抜き行事は、香川県の仲夏の到来を告げる風物詩として広く親しまれ、丸龜平野では樋門より勢いよく放流された水を利用して田植えが行われる。



資料4-3 象頭山八景 満濃池遊鶴  
[1845(弘化2)年] (まんのう町所蔵)



資料4-4 讲岐琴平名所絵葉書  
[昭和初期]  
(香川県立ミュージアム所蔵)



資料4-5 満濃池水掛村々之図  
[1870(明治3)年]  
(香川県立ミュージアム所蔵)



写真4-40 満濃池ゆる抜きの風景

第4-2表 満濃池歴史資料一覧表(古代~近世)

古代			
分類	資料名	著者	作成年・出版年
文芸	今昔物語集 卷二十 本朝附仏法 第十一 「龍王、天狗のために取られた話」	不詳	平安時代後期
	今昔物語集 卷三十一 本朝附雜事 第二十二 「讃岐國満濃農の池をぐずい國司の話」		
	日本紀略 弘仁十二年五月二十七日条		
その他	萬濃池後碑文	不詳	鎌倉時代前期、建仁元年(1201)
中世			
分類	資料名	著者・作者	作成年・出版年
文芸	志度寺縁起 当願暮当之縁起	兼空	鎌倉時代末期～南北朝時代
絵画	絹本着色志度寺縁起 白杖童子縁起 当願暮当之縁起	不詳	鎌倉時代末期～南北朝時代
その他	善通寺一円保差図(善通寺伽藍井寺領繪図)	不詳	鎌倉時代末期、徳治2年(1307)
	賀茂別雷神社文書	-	室町時代、長禄2年(1458)、永正17年(1520)
近世			
分類	資料名	著者	作成年・出版年
絵画	満濃池御普請所繪図	合葉文山(画)	江戸時代末期、嘉永年間(1848-1854)
		友部方升(詩歌)	
		友部三冬(詩歌)	
		藤井高尚(詩歌)	
		奈良松莊(詩歌)	
	象頭山十二景圖 二巻 十二 萬農曲流	治濟(詩歌)	
		日柳無石(詩歌)	
地誌	象頭山十二景圖 十二幅 十二 萬農曲流	野村常眞	江戸時代前期、万治年間(1658-1660)
		狩野時信(画)	
		林泰翁(詩文)	
	象頭山八景 満濃池遊鶴	上左兵衛(書)	江戸時代前期、延宝元年(1673)以降
		長山人直(画)	
	玉藻集	有禮(詩)	江戸時代末期、弘化2年(1845)
		小西可春(脚原小一郎)	
その他	金毘羅山名勝図会	石津亮澄(著)	江戸時代後期、文化年間(1804-1818)
		大原東野(画)	
		琴陵宥怡(画)	
		新原為家(詩歌)	
		藤井高尚(詩歌)	
	讃岐巡遊記	琴陵宥怡(詩文)	
		酒井政量	江戸時代後期、寛政11年(1799)
	金毘羅參詣名所図会	桃齋(著)	江戸時代末期、弘化4年(1847)
		浦川佐(挿絵)	
		桜原藍葉・梶原藍水(著)	
その他	讃岐国名勝図会 満濃池 池宮	松岡闇(画)	江戸時代末期、嘉永7年(1854)
		藤井高尚(詩歌)	
		幸田惟親(詩文)	
		酒井正敬(詩歌)	
		藤春嶺(詩文)	
	象頭山參詣道紀州加田ヨリ讃岐遍井播磨名勝附	金見蘿、美玉堂	江戸時代末期
		-	
その他	満濃池營築図	-	江戸時代前期、寛永年間(1624-1645)
	満濃池繪図 天保8丁酉年	-	江戸時代後期、天保8年(1837)
	讃州那珂郡分間画図	-	江戸時代中期
	讃岐国絵図	-	江戸時代初期、慶長年間(1596-1615)末
	讃岐国絵図	-	江戸時代前期、寛永10年(1633)
	矢原家文書	-	江戸時代前期、慶長8年(1601)、寛永12年(1635)
	天保国絵図 讃岐国図	-	江戸時代末期、天保9年(1838)

第4-3表 満濃池歴史資料一覧表(近代～現代)

		資料名	編著者・作者 ・出版元	作成年・出版年
		近代		
分類				
文芸	讃岐名勝集  怖村書屋詩集  吉井勇の詩歌「満濃池に遊びて」	矢柳平(編) 日柳活版所(出版) 梅溪通治(詩歌) 梶原景謙(詩歌) 藤井高尚(詩歌) 松平頼讚(詩歌) 松岡潤(詩歌) 佐伯矩雅(詩歌) 森寛斎(詩歌) 矢原正照(詩歌・詩文)	明治40年(1907)	
		赤松景福		大正15年(1926)
		吉井勇		昭和11年(1936)
		三好今三郎		大正5年(1916)
		香川県営満濃池竣工記念繪葉書		昭和2年(1927)
		満濃池弘法大師銅像除幕記念繪葉書	満濃大師會	昭和8年(1933)
		讃岐琴平名所繪葉書	昭和初期	
		讃岐二百景	昭和初期か	
		金刀比羅宮御境内及讃岐名所圖繪	小野秀八	昭和2年(1927)
		琴平急行沿線名勝鳥瞰図	昭和5年(1930)以降	
絵葉書 写真	真野池記(石碑)	矢原正教(撰文・題額), 矢原正照(染筆・建立)	明治3年(1870)以降	
	松坡長谷川翁功德之碑(石碑)	山縣有朋(題字揮毫), 品川尔二郎(碑文選者), 衣笠義谷(揮毫)	昭和6年(1931)	
	満濃池之図	-	明治3年(1870)	
	満濃池水掛村々之図	-	明治3年(1870)	
	讃岐国那珂郡満濃池近郷御料私領絵図	-	嘉永7年(1854)以降, 明治2年(1869)以前	
その他	原泉太郎讃岐志井同国名勝図繪納貢金円下賜 太政頒典・外編・明治四年・明治七年・官憲・賞典恩典	-	明治4年(1871)～明治7年(1874)	
	名東県厅藏西讃府志外一部士族梶原泉太郎藏讃岐外一部 獻納申立並貢金達 公文類・明治六年・第二百四十七卷・明治 六年十二月・諸県伺(二)	-	明治6年(1875)	
現代				
分類		資料名	作者・選定元・ 出版元	作成年・出版年
絵画	油彩「満濃池」	小西嘉純	平成14年	
選定	四国新聞 昭和43年10月18日付 新さぬき百景	四国新聞社	昭和43年(1968)	
	残したい「日本の音風景100選」「満濃池のゆるぬきとせせらぎ」	環境省	平成8年	
	ダム湖百選	一般財團法人水源地環境センター	平成17年	
	地域活性化に役立つ近代化産業遺産	経済産業省	平成21年	
	ため池百選	農林水産省	平成22年	
その他	世界かんがい施設遺産	国際かんがい排水委員会	平成28年	
	満濃池ガイドマップ	NPO法人まんのう池コイネク	平成30年	
	名勝満濃池パンフレット	まんのう町	令和2年	

### 第3節 多様な視点場

満濃池の風致景観の観賞は、江戸時代後期～幕末の地誌である『金毘羅山名勝図会』や『讃岐国名勝図会』が示すように、北西から南東に向かって、広大な堰堤と池面の背景に大川山などの讃岐山脈の山容を収める視点を主としていた。(第4章第1節で詳述)。

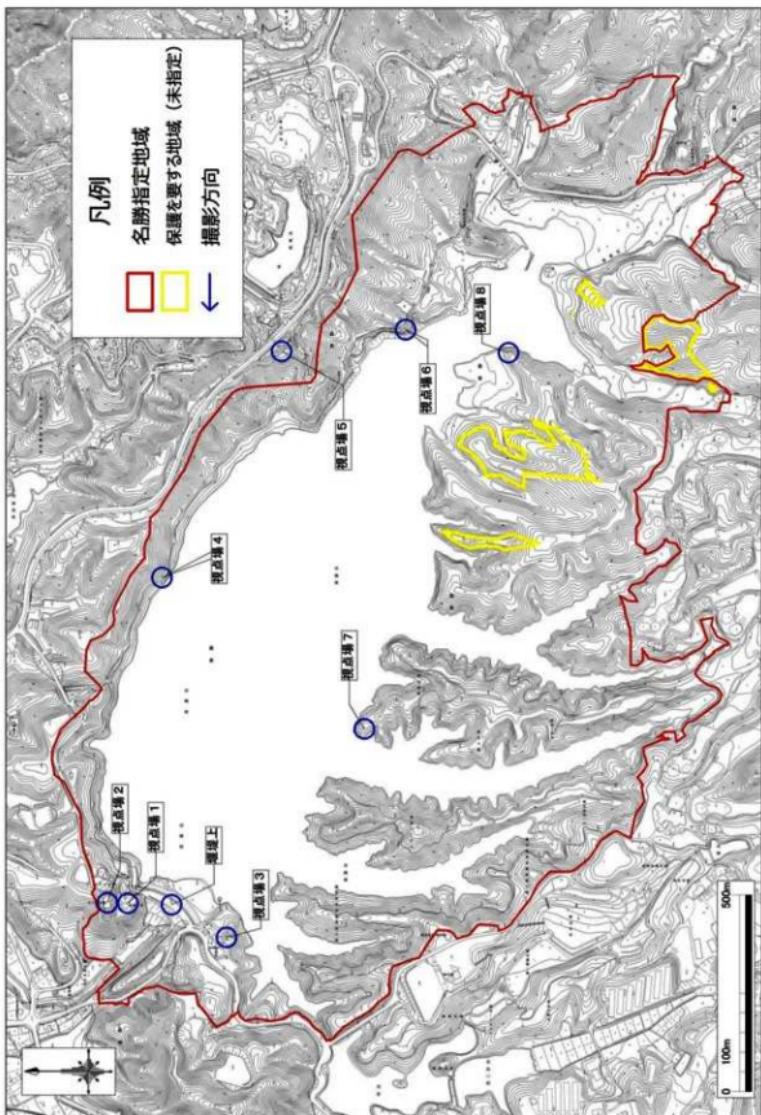
しかし、満濃池の規模は広大であり、地質的条件により池岸を中心とした周囲の地形も複雑に変化をみせるため、潜在的な視点場が他にも存在すると考えられる。

満濃池の保存活用計画策定にあたっては、主要な視点場である堰堤上からの観賞の他、満濃池をめぐる観賞の特性を総合的に把握することも重要であると考えられたため、視点場についての調査を行った。地形図上で観賞の候補地を検討した上で令和2年度に踏査を実施した。結果、堰堤上の他に、以下の8地点を新たな視点場として把握した。(第4-4表、第4-3図)。

なお、調査地点は、現状の植生により眺望に支障をきたすものであっても、今後の管理によって活用が見込まれるものも含んでいる。

第4-4表 名勝満濃池視点場一覧

名 称	場 所	視線方向	眺望の特徴
視点場①	神野神社(鳥居付近)	南東	堰堤や余水吐などの構造物や護摩壇岩を前側に置いて、池面の広がりをやや高い位置から俯瞰することができる。
視点場②	かりん会館	南東	高所から池面と複雑に入り組む南岸地形を俯瞰することができる。(ただし、手前に樹木が繁茂して見通しを阻害している。)
視点場③	神野寺(弘法大師像前)	東	高所から堰堤や取水塔、護摩壇岩が一望の下に見える。(ただし、手前に樹木が繁茂して見通しを阻害している。)
視点場④	北岸中央(遊歩道)	南	池面を介して正面に池岸が複雑に入り組む南岸を望むことができる。池幅が最も広い位置となり、広範囲にわたって池面を見渡すことができる。
視点場⑤	国営讃岐まんのう公園 展望デッキ	西	丘陵上より、池面や堰堤の奥に聳える象頭山(名勝及び天然記念物)を望むことができる。堰堤の反対方向より、満濃池の全体像を俯瞰することができる。(ただし、満濃池側から公園内に入ることはできない。)
視点場⑥	北岸東側(遊歩道)	西	視点場⑤と同様に池面や堰堤の奥に聳える象頭山(名勝及び天然記念物)を望むことができるが、水際からの目線で池面の広がりを体感することができる。
視点場⑦	南岸西側 (満濃池森林公園)	北西	満濃池の中でも水際へ近づくことのできる数少ない箇所で、池面を介して堰堤前面や護摩壇岩、北岸の直線的な池岸の地形を望むことができる。
視点場⑧	南岸東側	東	満濃池の中でも水際へ近づくことのできる数少ない箇所で、池底が遠浅となっていることから、水位の変化を敏感に反映して水面の風景の変化を楽しむことができる。



第4-3図 名勝満濃地根点場位置図

### 視点場①

神野神社鳥居付近から南方向への眺望である。池面を介して奥に南岸の丘陵、讃岐山脈を眺めることができ、視線中央には大川山が収まる。堰堤上の視点場との比較では、やや上からの視線で俯瞰的に捉えることにより、中央の池面のスケールが強調されている。神野神社の参道上に位置することから、多くの参拝者が訪れる視点場である。



写真4-41 視点場①より南東を望む

### 視点場②

かりん会館のデッキから南方向への眺望であり、視点場①より標高がやや高い位置となるため、奥側の池面の形状や複雑に入り組む南岸の丘陵稜線をみることができる。かりん会館は町立の研修施設であり、満濃池に関する展示スペースを設けているなどガイダンス施設としての機能を果たしていることから、視点場と一体的な活用が期待できる。近年、かりん会館前方の樹木(落葉広葉樹)が成長し、着葉期に眺望が遮蔽されている。



写真4-42 視点場②より南東を望む

**視点場③**

堰堤左岸側(西側)の神野寺境内、弘法大師銅像前からの眺望である。本質的価値を構成する堰堤や護摩壇岩、取水塔が一望の下に眺めることができるとあるが、現状では繁茂する樹木により十分な眺望を確保することができない。視点場付近は、多くの参拝者でぎわう場所であるため、眺望の向上により、視点場の活用効果が高まることが期待される。



写真4-43 視点場③より東を望む

**視点場④**

北岸中央付近の遊歩道南方向への眺望である。池面を介して正面に池岸が複雑に入り組む南岸を望むことができる。この視点場の位置は、池幅が最も広い位置となることから、堰堤上の視点場とは異なった方向で、広範囲にわたって池面を見渡すことができる。



写真4-44 視点場④より南を望む

**視点場⑤**

池の奥部となる北岸東側の国営讃岐まんのう公園内に設けられた「パノラマ展望台」から北西方向への眺望である。高台に位置するため、満濃池の全体像を俯瞰することができ、堰堤を介した象頭山(名勝及び天然記念物)の山容をみることができる。高所から満濃池の全景を見渡せる、唯一のポイントである。



写真 4-45 視点場⑤より西を望む

**視点場⑥**

満濃池北岸遊歩道の南西に張り出した池岸から北西方向への眺望である。視点場⑤と同方向への眺望であるが、水際に近い位置からの目線となる。池越しに象頭山(名勝及び天然記念物)の山容をみることができる。特に、夕暮れ時には、池面に映る夕焼け空と象頭山の山容が美しく、多くの人々が写真撮影のため訪れている。



写真 4-46 視点場⑥より西を望む

**視点場⑦**

南岸西側の香川県満濃池森林公園内の半島先端付近の水際から北西方向への眺望である。堰堤上からの眺望と反対方向で、奥に丘陵・山岳を見ない点でも対照的である。また、水際まで降りると堰堤や取水塔、護摩壇岩を望むことができる。



写真4-47 視点場⑦より北西を望む

**視点場⑧**

南岸東側の半島状に突き出た池岸から東方向への眺望である。池奥の池面や池岸、丘陵が主な対象となることから、この場所では広大なため池という印象は薄れ、山間部の沼沢地のような風景となる。また、満濃池の水位が低下すると、満濃池の嵩上げによって水没した五毛村の名残を残す地形や江戸時代の境界標や「山の神社」の基礎の石積が現れる。池底が遠浅となっていることから、水位の変化を敏感に反映して水面の風景の変化を楽しむことができる。



写真4-48 視点場⑧より東を望む



写真4-49 視点場① 神野神社鳥居



写真4-50 視点場② 着葉期の眺望



写真4-51 視点場③ 弘法大師銅像前



写真4-52 視点場④ 広大な水面



写真4-53 視点場⑤ パノラマ展望台



写真4-54 視点場⑥ 堤堰越しの象頭山



写真4-55 視点場⑦ 取水塔



写真4-56 視点場⑧ 山の神社基礎の石積